



កម្ពុជា~យើងពិតជាមានចិត្តរំភើបក្រៃលែងចំពោះព្រឹត្តិការណ៍ដ៏អស្ចារ្យនេះ~

カンボジア～素敵な出会いをありがとう～



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人 鹿児島県国際交流協会

はじめに



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 弓 場 秋 信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成3年にマレーシアに派遣し、今年23回目を迎えました。本事業は、開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通じて、国際性豊かな青少年を育成することを目的に、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会を実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオスの5ヶ国に県下一円から今回の16名を含む285名の中高生を派遣しました。

今回の派遣国は、本事業では初めてとなるカンボジアです。1953年にフランスから独立し順調に国づくりが進められていましたが、1970年から1991年にかけての内戦と圧政による混乱、特に1975年から1979年のポル・ポト政権下での知識階級を中心とした大虐殺は、その後の国づくりに物心両面で大きな爪痕を残しました。悲しい歴史を乗り越え新たな国づくりに取り組むカンボジアに、日本を含む国際社会が様々な援助を行っています。その一つが、1965年に発足した青年海外協力隊事業です。事業発足と同時に派遣が始まったカンボジアは、前述の事情で中断を余儀なくされましたが、治安の回復を待って再開されました。現在は、ASEAN派遣国の中で最多の隊員が、カンボジアで人づくりに活動中です。本事業でのカンボジア派遣に、住環境や保健面での不安はありましたが、国際協力の最前線に触れる現場として最適と考え決定しました。

本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、枕崎市、南九州市、南さつま市からの推薦11名と、企業の協賛を得ての実行委員会推薦の5名は、2回の事前研修でクメール語、カンボジア事情、青年海外協力隊活動と国際協力、日本・鹿児島について学び、7泊8日の日程で鹿児島空港を後にしました。

団員は、国際協力機構JICAカンボジア事務所で、カンボジアにおける青年海外協力隊事業や国際協力等について学んだ後、首都プノンペンの観光省で活動するシニアボランティア、協力隊員の活動状況を学び、ホームステイ先バタンバン州ソムロン村に移動しました。村での4泊のホームステイ期間中に、協力隊員が活動するバタンバンチアシム小学校やバタンバン中学校教員養成校で活動視察と学生との交流、そして村人との文化交流を行いました。

ここに団員の日々の体験・感想が綴られた報告書「កម្ពុជា~យើងពិតជាមានចិត្តរំភើបក្រៃលែងចំពោះព្រឹត្តិការណ៍ដ៏អស្ចារ្យនេះ~ (カンボジア～素敵な出会いをありがとう～)」を作成致しましたので多くの皆様にご覧頂ければ幸甚に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、国際協力機構九州国際センター（JICA九州）、JICAカンボジア事務所、HOCの皆様、心温まるもてなしでホームステイを受け入れて頂いたバタンバン州ソムロン村の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますと共に、今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜ります様お願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

ごあいさつ	1
鹿児島県商工労働水産部観光交流局長 武盛 武士	

第23回（平成26年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要	2
参加団員等名簿	3
スケジュール	4
地図	5
体験事業ドキュメント（総集編）	6

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

団員が感じたこと	14
----------------	----

「目で見て、肌で感じたカンボジア」	有 川 輝
「カンボジアに行って」	野 村 優 華
「この1週間で学んだこと」	三 浦 若 葉
「環境と人の繋がり」	上 蘭 晴 日
「カンボジアと私」	山 口 花
「カンボジアで学んだ事」	園 田 千 尋
「4日間のホームステイで感じたこと」	福 田 まりや
「カンボジアでの体験」	村 上 武
「7月21日から28日までの1週間」	小 宮 和歌菜
「カンボジアで過ごして感じたこと」	中之蘭 明日香
「カンボジアに行って思ったこと」	新 原 瑠 海
「カンボジアでの『自感』」	今 村 安 里
「カンボジアってどんな国？」	白 鳥 康 代
「カンボジアで学んだこと」	川 節 さやか
「将来を見据えて」	内 村 朱 里
「国際協力体験事業を通して」	佐々木 拓 真

団長報告	30
------------	----

「輝く未来へ」

弓 場 秋 信 （鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長）

同行者感想	31
-------------	----

「体験事業に同行して」	福 永 未 帆
「国際協力体験事業に同行して」	谷 口 光 代
「国際協力体験事業に同行して」	坂 元 絵 理
「カンボジアに同行して」	吉 崎 美 幸
「衝撃と感動の日々」	森 山 莉華子
「カンボジア体験記」	柳 沼 雅 貴

新聞記事	37
------------	----

参考資料

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要	42
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績	43

ご あ い さ つ



鹿児島県観光交流局長

武 盛 武 士

平成26年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し、それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や、現地で協力活動体験を行うことで国際協力に対する理解を深めるとともに、現地の人々との交流を通じて相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成することを目的としております。

成長著しいアジアの時代の到来を見据え、同地域の環境、経済、多様な文化などに精通した人材を育成するため、県でも様々な施策を積極的に推進しておりますが、現代の国際社会を取り巻く諸問題を解決していくためには、国民一人ひとりが自らの国や地域について見つめ直すとともに、異なる文化・習慣・考え方などについて理解を深める姿勢が重要になってきております。

第23回目となる今回の体験事業では、初めてカンボジアを訪問されました。カンボジアはASEAN（東南アジア諸国連合）加盟国の中でも後発開発国ですが、過去10年間平均8%の成長率を達成しており、順調な経済成長を遂げています。日系企業による投資も着々と増加しており、今後も安定した経済成長が見込まれる国として注目されています。

7月20日から7泊8日の日程で、現地視察や協力活動体験などを行った団員の皆さんは、この体験事業を通じて、異国の地で国際ボランティアとして活躍する青年海外協力隊員の活動に触れ、また、ホームステイや地元の学校との交流等でカンボジアの方々との心のふれあいを体験したことで、国際協力や相互理解の必要性、重要性を実感されたことと思います。

また、異国の地に身を置くことで自国の文化・慣習・生活等についてグローバルな視点から考え、気付いたことが多々あったのではないかと思います。それらのことを心に深く刻み、皆さんが将来国際性豊かなたくましい若者に成長されることを心から期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体及び実施に当たり御支援・御協力をいただきました国際協力機構九州国際センター並びに青年海外協力隊の皆様へ心から感謝を申し上げますとともに、関係者の皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第23回（平成26年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 主 催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会
- 2 共 催 鹿児島市、鹿屋市国際交流協会、枕崎市教育委員会、
霧島市国際交流協会、南さつま市友好交流推進協議会、
南九州市教育委員会
- 3 後 援 鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構
- 4 協 力 在日カンボジア王国大使館
- 5 協 賛 鹿児島空港ビルディング(株) 鹿児島トヨタ自動車(株)
鹿児島ヨコハマタイヤ(株) (株)鹿児島銀行
(株)下堂園 (株)ミサカ
(株)Misumi (株)山形屋
(株)レイメイ藤井 キンコー醤油(株)
小正醸造(株) 薩摩酒造(株)
太陽運輸倉庫(株) 南国殖産(株)
弓場貿易(株)
- 6 事業の流れ 4月～5月 募集・団員決定
6月14日（土） 第1回事前研修
7月5日（土）～6日（日） 第2回事前研修
7月20日（日） 出発
7月27日（日） 帰国
7月31日（木） 表敬訪問
8月17日（日） 報告会
9～10月 報告書作成
- 7 派 遣 国 カンボジア王国
- 8 派 遣 期 間 平成26年7月20日（日）～7月27日（日）
- 9 派 遣 人 員 (1) 参加者 16名
(2) 引率者 7名

参加団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	市 町 村
1	あり かわ ひかる 有 川 輝	女	鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校	2	鹿 児 島 市
2	の むら ゆう か 野 村 優 華	女	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	1	鹿 児 島 市
3	み うら わか ば 三 浦 若 葉	女	鹿児島大学教育学部附属中学校	2	鹿 児 島 市
4	うえ その はる か 上 蘭 晴 日	女	鹿児島県立鹿屋農業高等学校	3	鹿 屋 市
5	やま ぐち はな 山 口 花	女	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	2	鹿 屋 市
6	その だ ち ひろ 園 田 千 尋	男	鹿児島県立川辺高等学校	1	枕 崎 市
7	ふく だ まりや 福 田 まりや	女	鹿児島県立国分高等学校	2	霧 島 市
8	むら かみ たけし 村 上 武	男	霧島市立陵南中学校	3	霧 島 市
9	こ みや わ か な 小 宮 和歌菜	女	鹿児島県立川辺高等学校	1	南 さ つ ま 市
10	なかのその あす か 中之蘭 明日香	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	南 九 州 市
11	にい はら る か 新 原 瑠 海	女	鹿児島県立加世田高等学校	2	南 九 州 市
12	いま むら あす か 今 村 安 里	女	鹿児島県立松陽高等学校	3	日 置 市
13	しら とり やす よ 白 鳥 康 代	女	鹿児島県立志布志高等学校	3	曾 於 市
14	かわ せつ さやか 川 節 さやか	女	鹿児島県立大島高等学校	2	奄 美 市
15	うち むら あか り 内 村 朱 里	女	学校法人鹿児島学園龍桜高等学校	3	始 良 市
16	さ さ き たく ま 佐々木 拓 真	男	鹿児島県立薩摩中央高等学校	3	さ つ ま 町

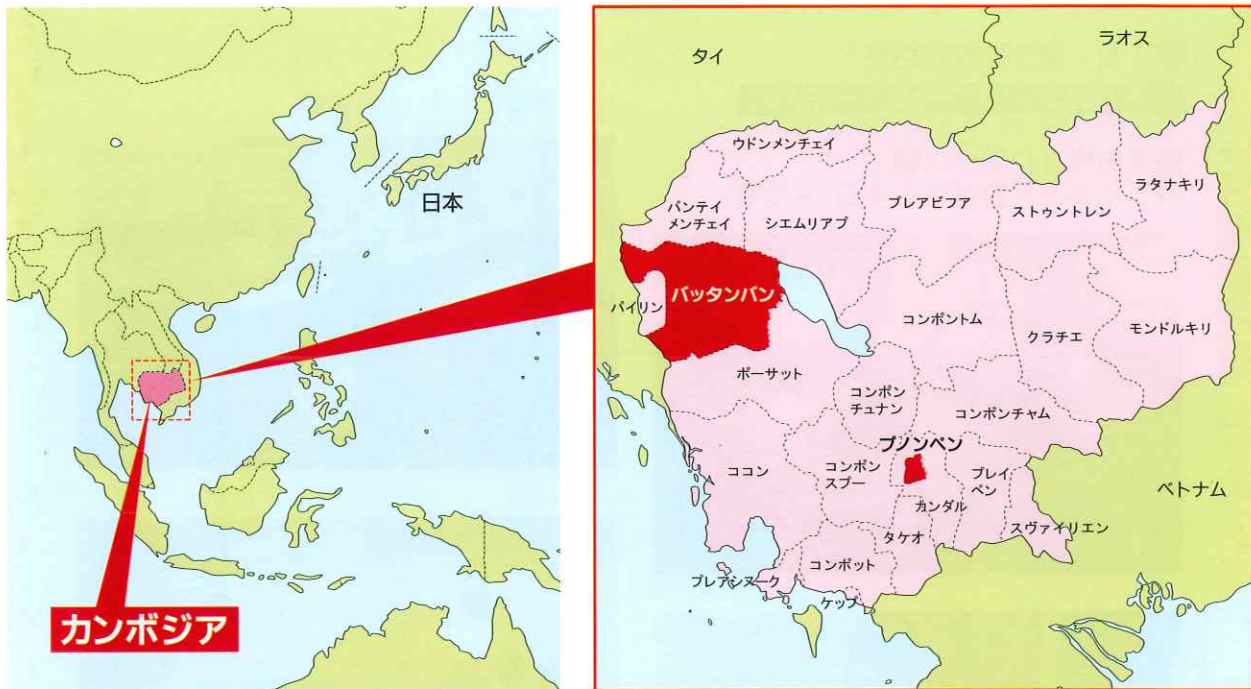
■ 同行者

		名 前	性別	備 考
1	団 長	ゆみ ば あき のぶ 弓 場 秋 信	男	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長
2	調 整	ふく なが み ほ 福 永 未 帆	女	青年海外協力隊カンボジアOG（理数科教師）
3	健康管理	たに ぐち みつ よ 谷 口 光 代	女	青年海外協力隊モロッコOG（助産師）
4	健康管理	さか もと え り 坂 元 絵 理	女	青年海外協力隊ボリビアOG（保健師）
5	調 整	よし さき み ゆき 吉 崎 美 幸	女	公益財団法人鹿児島県国際交流協会 交流推進員
6	記 録	もり やま り か こ 森 山 莉 華子	女	南日本新聞社 報道部 記者
7	記 録	やぎ ぬま まさ たか 柳 沼 雅 貴	男	株式会社南日本放送 報道局テレビ制作部

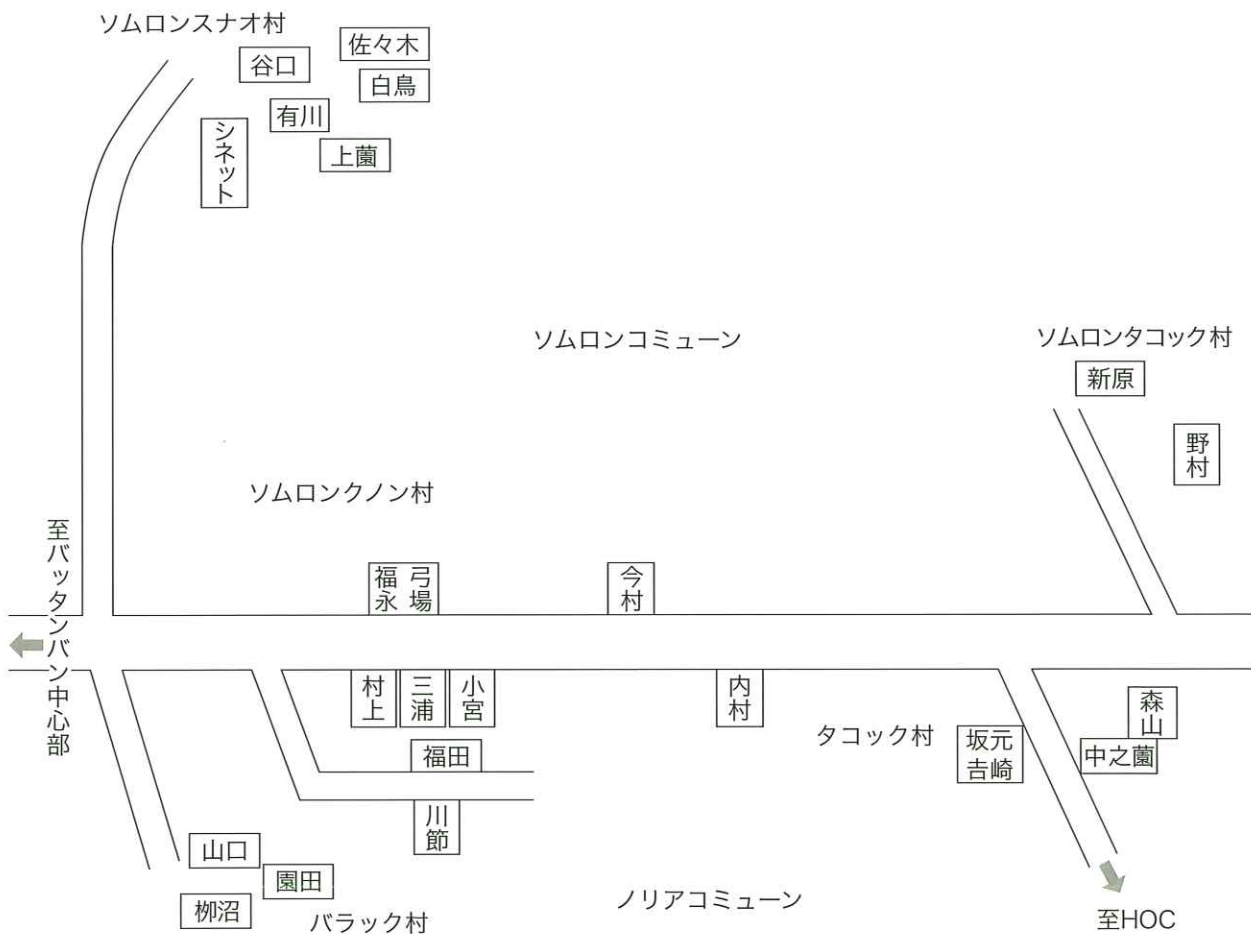
スケジュール

月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月20日	日	鹿児島空港 ソウル(仁川空港) ソウル(仁川空港) プノンベン (プノンベン国際空港)	13:30 15:55発 17:30着 18:40発 22:05着	KE786 KE689 バス	集合・結団式・チェックイン 鹿児島空港出発 韓国・仁川空港着 韓国・仁川空港発 プノンベン空港着 ホテルへ移動	ホテル
7月21日	月	プノンベン	8:30～ 9:30～11:00 12:00～13:00 14:00～16:00 18:00～	バス バス	出発 JICA カンボジア事務所 表敬 昼食(イオンモール) JICA ボランティア活動視察 【観光業：八木さん、環境教育：野村さん】 場所：観光省 現地関係者との食事会：クメールスリン	ホテル
7月22日	火	プノンベン バットタンバン	9:30～ 18:00頃	バス	ホテル発 バットタンバン着	ホームステイ
7月23日	水	バットタンバン	7:30 8:00～10:00 14:00～	バス	出発 青年海外協力隊活動視察 【小学校教育：森本さん・須藤さん】 場所：バットタンバン・チアシム小学校 午後：ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月24日	木	バットタンバン	終日		ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月25日	金	バットタンバン	11:00～ 11:30～14:30 17:00～	バス	出発 学校交流 場所：バットタンバン中学校教員養成学校 夜：お別れ会 場所：Hope of Children (HOC)	ホームステイ
7月26日	土	バットタンバン シェムリアップ シェムリアップ (シェムリアップ国際空港)	8:00 15:00～ 21:00 23:25発	バス	朝：村とのお別れ →シェムリアップへ移動 午後：アンコールワット視察 空港へ移動	機内泊
7月27日	日	ソウル(仁川空港) ソウル(仁川空港) 鹿児島空港	6:35着 13:00発 14:35着	KE688 KE785	解団式(空港ロビー)	

地図



ソムロン村ホームステイ先地図



体験事業ドキュメント（総集編）

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

第1回・第2回事前研修

6月14日(土)、7月5日(土)～6日(日)

語学研修（クメール語）
カンボジア人留学生のキム ヘン君



現地での出し物の練習



初めてメンバー全員と顔を合わせて仲良く話せるか不安もありましたが、みんなで楽しく研修できてよかった。

山口 花

体験事業についての説明



語学研修成果発表 （歌の披露＆家族の紹介）



7月20日(日)

結団式・出発



カンボジアの生活をよりよくする
為に頑張っているのだと思った。
カンボジアの為に日本人が役
立っているということが、とても
かっこ良かった。

小宮 和歌菜

7月21日(月)

JICA カンボジア事務所訪問



『物資を支給するのではなく、人を育てることが大切』
この言葉が何度も出てきて、心を動かされた。

三浦 若葉

昼食：イオンモール



7月21日(月)

午後：JICAボランティア活動現場視察

観光省

観光業 シニア海外ボランティア：ハホさん



国民の意識というのが、国を変えるために一番必要なものなのだなと思いました。

内村 朱里

環境教育 青年海外協力隊：野村さん



自分に何が出来るか・何をしたいか・何が求められているか(must, want, can) この3つを聞いて、進路にも役立てたいと思いました。

上園 晴日



夜：食事会（島田さん講話）

JICA派遣専門家の島田さん



「魚を与えればその人は一日生きることが出来る。魚の釣り方を教えればその人は一生生きることが出来る」という話が印象的でした。

今村 安里



7月22日(火)

ホームステイ先へ



7月23日(水)

協力隊活動視察 バッタンバンチアシム小学校

青年海外協力隊：森本さん



青年海外協力隊：須藤さん



小学校教育の難しさや、
苦労した点、カンボジアの
教育事情がよくわかった。
夢が教員なので、とても
いい体験が出来た。

園田 千尋

7月24日(木)

ホストファミリーとの一日



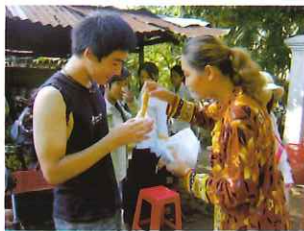
お母さんとか子供たちともけっ
こう仲良くなって嬉しい。もっと
カンボジア語が通じればい
いけどあんまり通じないもどか
しい感じも、これはこれで楽し
んでる(笑)

新原 瑠海



7月24日(木)

ホストファミリーとの一日



折り紙にすごく喜んでくれて、子供たちがたくさん集まって楽しかった。
中久 蘭 明日香

7月25日(金)

学校交流：パタンバン中学校教員養成学校



学生が、「学校に行けない子供たちも勉強が出来るように田舎に行って教えたい」と言っていたことが特に印象的だった。

佐々木 拓真



お別れ会



ソーラン節が盛り上がり良かった。恋するフォーチュンクッキーも楽しく踊れた。別れが寂しくて泣いてしまった。

有川 輝



7月25日(金)

お別れ会



7月26日(土)

ホストファミリーとのお別れ



別れるのは寂しくて、
もっと一緒にいたかった
です。また会いにカンボ
ジアに行きたいと思い
ました。

福田 まりや

ホストファミリーとのお別れの
時には、本当に悲しくて涙が
出るのをずっとこらえていました。

野村 優華



7月26日(土)

シェムリアップ観光



世界遺産アンコールワット遺跡観光



アンコールワットはとても広くきれいで感動した。しかし、一番高い所に登ることが出来なかったのと、スコールにあったのが、とてもショックだった。

村上 武

アプサラダンスショー



7月27日(日)

解団式



カンボジア研修がここまで楽しく、自分のためになるとは思っていませんでした。
この一週間は人生の中でもかけがえのないものになりました。

川節 さやか

7月30日(水)・7月31日(木)

帰国表敬訪問



支援してくださった県内企業や県庁を訪問しました。
この事業に携わっていただいた全ての人に感謝します。

団員一同

8月17日(日)

報告会



この15人と出会い一緒にカンボジアに行けた
ことは、私の一生の思い出に思います。
みんなと出会えて本当によかった。

白鳥 康代



目で見て、 肌で感じたカンボジア

鹿児島玉龍高等学校 2年 有川 輝

私が過ごしたカンボジアでの一週間は、どこへ行っても驚きの連続でした。

約9時間の移動を経てプノンペンの空港に着いたのは、午後11時頃でした。街はネオンが輝いていて、高さこそ低いものの現代的な建物が並び、まるで先進国のように感じたことが印象に残っています。プノンペンでは日本とはほとんど変わらない生活をして過ごしました。しかし、バットアンバン州の村に着くと家が様々な木に囲まれた、首都とはかけ離れた景色が広がっていました。

カンボジアに着いた翌日に JICA の事務所を訪問し、国民の識字率が70%台だと聞きました。教育がまだまだ行き届いていないのです。ホームステイ先に着いたときにそれを実感しました。私のホストファミリーのお母さんは少し読めていたのですが、他の家の話を聞いたところ、お母さんが文字を読めない家庭がたくさんありました。ポル・ポト政権時代の影響が未だに残っているのです。

私は以前見た映画で、ポル・ポト政権のことについて当時の話しを聞く場面があり印象に残っていましたが、ほとんど実感はありませんでした。しかし、現地の通訳さんがその時代のことについて詳細に話をしてくださり驚きました。特にお兄さんもポル・ポト政権時代を経験したということだったので、生の体験談に胸が痛みました。また、村のお姉さんと寺院に行ったときは、そこに killing field (キリングフィールド) があり、外からたくさんの頭蓋骨が見え、カンボジアの悲しい歴史にも少し触れました。

しかしその被害が特に甚大だったので、バットアンバン州の人は人助けや協力が好きだと聞き、私もその優しさに何度も助けられたと感じています。私のホストファミリーのお母さんは、私が初めて村に来た日に水浴びの仕方を私と一緒に浴びながら教えてくれたり、ご飯のことや様々な身支度も、言葉こそ通じないけれど身振り手振りで優しく教えてくれたりしました。お母さんとは、心で通じ合うことができたと思います。また村の方全員が私を本当の家族のように扱ってくれて、何度も市場で一緒におやつを

食べました。村との別れのときは本当に寂しかったです。

一週間のカンボジアでの研修を通して、私はカンボジアを肌で感じることができました。そして様々な面で、私がいかに恵まれているかを感じました。このような機会をくださり同行していただいた事務局の方々、一緒に楽しく研修をした団員、この事業に参加させてくれた家族、そして私のホームステイを受け入れてくださった村の方々、すべての人に感謝します。ありがとうございました。

カンボジアで過ごした、あの輝いていた瞬間の一つ一つはずっと、永遠に忘れません。もう一度、必ずカンボジアを訪れたいです。



ホームステイした家から見た景色



ホームステイ最終日に家族全員と 本人：中央

カンボジアに行って

鹿児島中央高等学校 1年 野村 優華

「カンボジアで地雷踏まないでね。」

カンボジアに行くことが決まった私に友達はどう言った。カンボジアに行く前までの私は、カンボジアと言えばアンコールワットと危険というようなイメージだった。発展途上国と聞いていたカンボジアは行ってみると、私の想像を変えることだらけだった。

西洋風の美しい建物が建ち並ぶ都市部。しかし、都市部は空と地面を見るべきだと考える。空を眺めると、美しい建物に圧倒されるが、視線を落とすとゴミの多さに驚かされる。

カンボジア生活3日目。私のホームステイ生活が始まった。ホームステイ先の家まで行く道も狭く整備されていないような道。どんな生活が始まるのか、不安と楽しみが交錯していた。まず、一番驚いたことがお風呂だ。日本のような湯舟は無く、水道も通っていない。蛇口さえも無い。どうやってお風呂に入るのだろうと考えていると、雨水を溜めた水がめから雨水を汲んでそれを浴びると教えてくれた。外で壁も無く、しかも雨水。日本では経験できないようなお風呂だった。次に炊事が驚いた。まるで宿泊学習を思わせる、薪に火をつけ、釜で調理を行うキッチン。煙で目が痛くなることもしばしばだった。最初は驚いていたが、慣れてしまうと当たり前のことだと思える。

日本での当たり前。水道が通り、ガスが設置され、電気がつく。しかし、日本での当たり前はカンボジアでは通用しないものだった。電気は3ヶ所、水道は通らずガスも無い。それでも人々は幸せに暮らしていた。私は言葉が少ししか通じず、歯がゆい思いも何度もした。しかし、カンボジアの人々は私の気持ちを理解してくれるかのようにとても親切にしてくれた。

私はびっくりして思わず、日本語で感情を表してしまったことがある。ホームステイ先の男の子が虫を私の手のひらに置いたからだ。私がクメール語で言い直そうと本を開いているとその男の子が

「ソムトッホ（ごめんなさい）。」

といたずらな笑みを含んで謝ってくれた。その時「言葉は通じなくても心は通じる」ということを実感した。

カンボジアでは、日本のような生活を送っていない、送れていないような人々が大勢いる。しかし、彼らは決してかわいそうではない。人に優しく、思いやる心をもっている。私はカンボジアへ行って学んだことがある。それは、思いやる気持ちと素直さを忘れてはいけないことだ。これからの生活の中で、困難に立ち向かうことがあっても、カンボジアでの生活を思い出し、乗り越えていきたい。



ホームステイ先の家



ホストファミリーと 本人：中央

団員が感じたこと

この一週間で学んだこと

鹿児島大学附属中学校 2年 三浦 若葉

この事業に参加する前の私は、国際協力というものに対して、ばくぜんとしたイメージしかもっていませんでした。テレビや新聞などで国際協力にたずさわっている人をよく見かけますが、それだけではあまり分らないのが私は嫌でした。国際協力とは一体どういうものなのか、どのような人たちがたずさわっているものなのか、現地へ行って実際に見て確かめることが必要だと私は思ったのです。

私たちが滞在したカンボジアは、空港から出た途端、日本とは全く違う雰囲気に圧倒されてしまうほど、環境がとても異なっていました。しかし、だんだんと一週間過ごすうちにカンボジアの雰囲気にも慣れてきて、日本へ帰るころには名残惜しくなってしまうほどでした。

私は、カンボジアで印象に残っていることが2つあります。1つは青年海外協力隊員の方の「国際協力は、人を育てることです。」という言葉です。私は今まで国際協力とは、物資などの支援だと思っていました。けれども何よりも大切なものは、現地の人々が自ら行動できるようになること。つまり、現地の人々を育てるということなのです。この言葉は、私の概念をくつがえすきっかけになりました。

2つ目は笑顔です。3日目から、バットンバン州にある村でホームステイをしました。ホームステイ先は、トイレも風呂ももちろん異なっていますし、家のづくりも、自分の家と大きく異なっていました。



村で友達になった同い年の子と 本人：左



お別れ会の様子 本人：中央右側

時には、日本が恋しくて、一人で泣きながら風呂を済ます日もありました。しかしホームステイの家族は、みんな笑顔で私を迎えてくださり、いつでも笑わせてくれました。そのおかげで、少しの寂しさもすぐに吹き飛んでしまったほどです。

また、協力隊員の皆さんも笑顔を絶やさずに任務を行っていました。あのよう、異国の地で一人、活動することは、とても容易なことではありません。しかし、笑顔は万国共通です。笑顔を絶やさず、懸命に活動されている協力隊員の皆さんの姿を見て、本当にすごいと思いました。

私はこの一週間、カンボジアに滞在して、多くの人と出会い、ふれ合うことができました。その中で、自分がどれほど恵まれた生活ができているのかが、日本とは違う環境に滞在して身にしみて分かりました。こうして、当たり前前に生活できていることは、決して当たり前ではないのです。だから、これから私は、毎日何事もなく当たり前前に生活できることに感謝して生きていきたいと思います。

そして、私の将来の夢である、国際協力を通して世界中の人々を助ける人間になれるよう、日々努力していきたいです。

環境と人の繋がり

鹿屋農業高等学校 3年 上 蘭 晴日

私は、カンボジアで体験した中で、印象に残った出来事が2つあります。

1つ目は、子どもたちの学びたいという気持ちがすごく大きかったことです。バツタンバン・チアシム小学校の訪問をした時、四年生の音楽の授業を見学させていただきました。皆、手や足を鳴らしながら、大きな声で元気いっぱいに歌ったり、キラキラ星などの曲を鍵盤ハーモニカで演奏したりしていました。皆とても楽しそうに、一生懸命に授業を受けていました。私も子どもたちと一緒に現地の歌である「アラピヤ」を歌いましたが、こんなに楽しく音楽の授業をしたのは、久しぶりだなと思いました。

そして、ホームステイ先です。村の子どもたちは、私が持ってきた指さし会話帳にすごく興味津々でした。文字を読んだり書いたりする事が楽しいらしく、ペンと紙を渡すと絵やクメール語の文字を色々書いていました。私が日本語やローマ字で名前などを書くと、それを真似して書き「できたよ。」と言って、笑顔で私に見せてくれました。

カンボジアで出会った多くの子どもたちは本当に素直で、学校の先生でもない私からたくさんの事を学ぼうとしてくれました。そんな姿を見て、日本の教育環境はこんなにも整っているのだから「学校が

だるい」「勉強したくない」と言っている場合じゃないなと思いました。学校に通って勉強する事、それは普通ではなく、日本にいるからこそできる事だと実感しました。

2つ目は、人と人とのつながり、そして温かさに触れられたことです。私がホームステイをしたソロムスナオ村は、村全体でとても仲が良く、昔の日本を見ているようでした。お母さんやお姉さん、子どもたちが本当に良くしてくれて、大勢で過ごす時間もこんなに楽しいものなだと感じました。残念ながら私は体調を崩してしまい、3日目の夜からはドクターがいる家にホームステイしました。しかし、そこでも家族の皆さんとても優しく、ふらふらな私を支えてくれたり、私が寝ている間におでこに冷えピタがばっちり貼られた似顔絵を描いてくれたりと、これが人の温かさなんだとすごく実感しました。

カンボジアで一週間を過ごして、私は自分や周りも驚くくらい考え方が変わりました。今まで悩んでいた事が小さく見え、違う視点からも考えられるようになりました。だけどすぐには変えられない事も多いです。まだまだ進路で迷いがあったり、これから新しい悩みがでてきたりするかもしれません。その時、カンボジアで体験し学んだ事を、強みにしていきます。そして何に対しても感謝の気持ちをもってこれから取り組んでいこうと決めました。後、悔いもたくさん残ってしまったので、もっともっと勉強をして、いつかまたカンボジアの皆さんに会いに行きます！



ホームステイ先の子供たち



2件目のホームステイの時の写真 本人：右

カンボジアと私

鹿屋女子高等学校 2年 山口 花

日本は平和で、様々な面で豊かな国です。誰もが義務教育という形で学校へ行き、読み書きをすることができます。食べ物もとても美味しく、去年は和食が無形文化遺産にも認定されました。ですが、このような日常や食事は私たちにとって当たり前のことです。そして、そうすることができる日本という国を、多くの人は幸せな国だといいます。

私は、カンボジアですごした1週間でこの「当たり前」ということについて深く考えさせられました。そして同時に、自分の中の固定観念や先入観によりどれだけ視野が狭くなっているのかを思い知らされました。

行く前に抱いていたカンボジアへのイメージは、内戦！地雷！発展途上！アンコールワット！というような本当にわずかな知識と黒い時代が残した汚点的な部分、それから、世界遺産のことだけ。だから行く前は本当に不安で、言葉やコミュニケーションのこと以上に、自分の命の心配をしていたくらいでした。それでも、心強い団員の仲間と同行者の方、それから、日本で心配しながら見送ってくれた友人や家族を信じ日本を出発しました。ですがこのような考えは大げさでした。飛行機に乗って約7時間、窓から見えた美しい夜景が、私の抱いていた不安も

先入観もカンボジアに対する負のイメージも一気に吹き飛ばしてくれたのです。道の形に沿って輝く街灯やネオンの放つオレンジや白の暖かい光が、1週間のカンボジア生活を後押ししてくれているようでした。

実際にカンボジアで過ごした七日間は、ホストファミリーをはじめとするそこに住む方々の温かさや、予想通り驚きの食べ物、逆に驚くほど美味しい食べ物の数々、また、やはりぬぐい去る事のできない内戦や波尔・ポト政権時代の傷跡など、語り尽くせないほどの衝撃と感動でいっぱいでした。

私は現地に行くまで、日本の方が豊かで幸せであると先進国にありがちな優越感を抱いていました。実際に、技術や経済面では日本の方がはるかに優位です。でも、カンボジアに行って、豊かさだけが幸せじゃないと強く感じました。家族と暮らせる、ごはんが食べられる、カンボジアの人たちはそんなさやかな日常にいつも感謝しながら生活しています。そしてそれを幸せだといいます。これは、豊かすぎる社会で生きる私たちが忘れていたことであると同時に、心が貧しいと言われている現代の私たちがもう一度思い出すべきことなのではないかとか感じさせられました。

今回のカンボジアでの研修は、私に強い感動を与えてくれただけではなく、小さな幸せを見つけ日々の生活に感謝しながら生きることがどれほど心を豊かにするか教えてくれた、私の人生において重要な通過点になりました。

参加して本当に良かったです。



別れの朝 本人：後列中央



アンコールワットにて 本人：左

カンボジアで学んだ事

川辺高等学校 1年 園田 千尋

はじめに、私のカンボジアでの研修を助めてくれた母と、その機会を作ってくれた高校の先生、またお世話になったJICAの皆さんや教育委員会の先生方、諸関係者の方々に心より感謝を申し上げます。私はこの研修を通して自分の知っている世界が小さいことを思い知らされました。自分の住んでいる日本だけでなく、他の国のために一生懸命協力や援助を行っている人が、こんなにもたくさんいるんだということを知り、本当に勉強させていただき感動しました。高校入学を機に、そろそろ自分のこと以外にも目を向け、社会に出ていく準備をしていかなければならないという母の勧めで、私は地元ボランティア活動にも参加しています。しかし、なかなか高校生活にも慣れず、自分のことで精一杯な毎日を送っていました。一日をこなすのがやっとな中、カンボジアの研修に参加させてもらいました。研修の日程はハードでしたが、明るく接してくれる団員の方々、知り合った仲間のおかげで、次第にカンボジアの知識と興味が増し、不安が期待へと変わっていききました。

カンボジアは私の想像とは違いとても過ごしやすい国でした。私の前向きな性格なのか、研修をきちんとしたので自信があったからなのかはわかりませんが、私はいろいろなことにチャレンジしました。特に食べ物に関しては、日本で味わうことのない香草や食材も多く、見た目で判断できかねるものもあっ



チアシム小学校で子供たちと 本人：左手前



ポンティアコーン

たのですが、何でも口にしてみました。アモックというココナッツを煮た料理が私のお気に入り、お土産にもたくさん買いました。他にも、ポンティアコーンという孵化しかけの卵や、カリッと揚げたクモなど、一見びっくりする物もありました。どれもおいしく、カンボジアの料理は私の口に合っていました。

ステイ先のファミリーとも仲良くなるように頑張りました。私の家族には、英語の話せる大学生のお兄さんがいたので、英語が通じて本当に助かりました。お母さんは、字が読めず私が書いた文章が通じませんでした。少し前までポル・ポト政権の時代だったので、その頃の人々は知識人がみな虐殺されていたので、基本的な教育を受けていないということでした。家族はとても親切でステイ後半に熱が出た時も、冷蔵庫はないのにわざわざ氷を買ってきてくれて心配してくれました。私は一緒にキャッチボールをしたり、こまを回したりして交流をしました。最後に作った簡単なまぜ寿司や、味噌汁、インスタントラーメンを喜んでくれて、ぜひ日本にも行ってみたいと言ってくれたのがうれしかったです。

小学校や教員養成校などで日本人が活躍している場面をたくさん見ることができてとても誇りに思いました。決して恵まれる環境ではないのに人々はとても前向きでした。

この海外研修を通して、自分が今できることについて考え直すことができました。そして将来、教育を受けることが難しい子どもたちに少しでも支援ができるように協力できたらいいと思います。

4日間のホームステイで 感じたこと

国分高等学校 2年 福田 まりや

私はこの海外派遣事業の4日間のホームステイでたくさんの思い出ができました。私がホームステイ先に着いたのは夜でした。街灯もなく真っ暗な状況で4日間もやっていけるのかと不安になりました。

1日目は、ついでにお風呂に入りました。そこで驚いたのは、溜め水をすくって体にかけることです。夜に冷たい水を浴び、髪が濡れたままだったのでお腹を壊してしまいました。腹痛と不安からか食欲がなくなり、ご飯をあまり食べられませんでした。作ってくれたホストマザーにとっても申しわけない気持ちになり、明日からはしっかり食べようと思いました。

2日目は午後からホストファミリーと過ごしました。どうにかコミュニケーションがとれ、食べたいものや行きたいところを何となく伝えられるようになりました。

3日目はホストファミリーと1日を過ごしました。朝は子ども達と市場や学校に行きました。朝から市場は多くの人々にぎわっていて、見たことのない食べ物や雑貨がたくさんありました。お寺の敷地内では普通にバイクで二人乗りをしていたり、食べ物を食べていたりして驚き、日本との違いを実感しました。お昼は仲良くなった近所の子供達とバレーやサッカーをして遊びました。ルールがよくわからなかったけど、点が決まったときに大はしゃぎする姿を見て心地良い感じがしました。また、部屋の中でボールを使った鬼ごっこのような遊びもしました。



近所の子供

夜はホストファミリーの為にちらし寿司といなり寿司を作りました。日本とカンボジアではお米が違いため上手にできませんでしたが、みんなおいしいと言って食べてくれたのでうれしかったです。

4日目はホストファミリーとお別れ会をしました。それぞれが日本で準備してきたパフォーマンスを順調に発表できました。現地の子供達もソーラン節を踊れるということで一緒に踊ることになりました。踊りながら子ども達の動きがキレッキレなことにびっくりしてしまいました。パフォーマンスが終わった後、子ども達が日本語の歌を歌ってくれたのでとても感動しました。時間がおして家に帰るのが遅くなりました。家族みんなで歩いて帰るとき、こうやってみんなで一緒に話をしながら歩くことは最後になるのだと思うと悲しくなりました。



お別れ会でホストファミリーと 本人：右

次の日の朝、お別れをしてシェムリアップへ向かいました。バスの中でこの4日間のホームステイを振り返って、もっと長くいたかったなあと思いました。楽しいことも辛いこともたくさんありましたが、全てのことが新鮮で私にとって良い思い出になりました。また、異なる文化や言葉の壁を越えて心が通じ合えたと思います。この体験で得た様々な気持ちや考えを忘れずに自分の将来に生かしたいと思いました。

カンボジアでの体験

陵南中学校 3年 村上 武

今回私は、東南アジアにあるカンボジアへ青少年国際協力体験事業の一員として活動を体験してきました。

最初は、カンボジアに行って現地の人々と上手くコミュニケーションをとることができるか不安でしたが、事前研修で、現地語であるクメール語を必死に勉強したおかげで、簡単な挨拶程度はできるようになり、少し自信ができました。

そして日本を出発して、カンボジアに着きました。日本とは違った、環境や景色による独特な雰囲気がありました。その日は遅かったのもうホテルに宿泊するだけでした。

2日目、JICA事務所の訪問と青年海外協力隊の活動を視察させていただきました。事務所では協力隊員の数や、活動内容などを詳しく教えていただきました。活動視察では、観光省で環境教員の隊員として活動している野村さんと、観光業のシニアボランティアの八木さんから、クリーンシティーコンテストの開催、観光地での美化活動などを聞いて、日本ではあまり耳にしない取り組みだと思いました。

3日目、首都プノンペンからホームステイ先のある二番目に大きい都市、バットアンバンに行きました。途中、お店でトイレ休憩があり、そこでココナッツの内側に近い白い部分を食べました。あまり甘くなくて、硬くて、おいしくなかったです。ホームステ

イ先には夜7時頃に着きました。ホストファミリーから、トイレとお風呂の場所の説明があった後、夕食を食べて就寝しました。

4日目、協力隊の森本隊員の活動を視察しました。子どもたちは、隊員の合図で日本の歌を歌ったり、鍵盤ハーモニカで演奏したりしていました。ハーモニ一のとれた合唱で感動しました。

5日目、ホストファミリーと一日を過ごしました。私は、日本からけん玉を持ってきていて、それで子どもたちと遊びました。とても気に入ったらしく、喜んでいました。遊び方を知らない子どもたちに、カタコトのクメール語で教える難しさを感じました。

6日目、教員養成校に行きました。学校の生徒とクメール語での自己紹介や、発音、読み方などを教えていただきました。最初は、名前も知らない人と話すことに緊張していましたが、挑戦してみたら話す事ができました。

その夜、HOCという孤児院でお別れ会がありました。私たちはダンスや書道のパフォーマンスをしました。HOCの方々は、日本の歌を歌ったり、ソーラン節を披露してくれたりしました。

7日目、ホストファミリーとお別れをしました。そして、夜の飛行機に乗り、日本へ向けカンボジアを飛び立ちました。

今回の体験事業から、日本では体験することができない色々なことが経験できました。その中で、コミュニケーションの難しさを一番感じました。今回の体験事業を今後の人生に生かしていきたいです。



チアシム小学校



ホストファミリーと 本人：中央

団員が感じたこと

7月21日から 28日までの1週間

川辺高等学校 1年 小宮 和歌菜

7月21日から28日までの1週間、国際協力体験事業に参加させていただきありがとうございました。

まず、渡航するために事前学習を受けたのですが、普段の生活の中で、何も気に留めていないようなことにも目を向けなければならず、自分の身を守ることも含めて多くの注意すべき点がありました。

私が悩んだことのひとつに、「カンボジアでは人の頭を撫でてはいけない」ということです。人の頭を触ることは、その人の頭の上にいる精霊を汚すことになることと知りました。ホストファミリーと、コミュニケーションをとる上で、子ども達がいることは私にとって大きな楽しみのひとつでした。それだけに日常のようにはいかない、注意しなければと思い戸惑いました。しかし、そんな心配をよそに、実際はホストファミリーが本当の娘のように、とても温かく迎えてくださり「褒める時には子ども達の頭を撫でてもいい」と教えてくださり、安心して家族に溶け込むことができました。ホストファミリーも、ご近所の方々も、とても仲が良く笑顔の絶えない、優しい人たちばかりで安心して過ごすことができました。



お別れ会で家族と 本人：右から2番目

一週間を終え、同じ国内で感じた貧富の差。プノンペンで見た大きな宮殿、痩せた家畜とともに生活をするバットアンパンの人たちの暮らし。じゅうぶん安全とはいえない校庭で、靴を履かずに走り回り楽しそうに飛び跳ねている子ども達。そして衝撃的だったアンコールワットでの出来事。このことは何より辛かったです。世界遺産アンコールワットの門の外には、頭と目だけがとても大きな痩せこけてしまった身体をした小さな子ども達と母親が座っていました。中に入ると小学生の子ども達が、大きな籠をかかえ「買ってください。買ってください。」と、私たちに写真や鉛筆を売りにきました。もし、一つでも何かものを買ってしまったら、物乞いをする他の子どもたちも寄ってきます。私よりも小さな子ども達が学校にも行けず、家のために働いている姿がありました。自分はただただ「NO!」としか言えないことがとても辛かったです。

今の私が住む日本は、色々な意味で本当に恵まれている所だと思えました。カンボジアの人々のなかで、中年の人たちは、大半の人が字は読めませんでした。それは、過去にカンボジアで起こったベトナム戦争が原因でした。波尔・ポト政権の影響で能力が高い人は殺されていき、今の中年の人たちに文字を教える人がいなくなってしまったからだそうです。こういった過去を知り、私は、ただ単に外国への憧れだけではなく、外国のために何か出来ることはないのだろうかと考えていきたいと思うようになりました。JICAの活動を通して、日本のことをまずは知る、いろいろなことを自ら学びたいと思えるようになりました。貴重な体験をありがとうございました。



世界遺産アンコールワットで物乞いをする子ども

カンボジアで過ごして 感じたこと

川辺高等学校 3年 中之蘭 明日香

私はカンボジアへ行き、多くの貴重な体験と充実した一週間を過ごした。その一週間の中で私が特に印象に残ったことが2つある。

1つ目は、貧富の差についてだ。プノンペン、バットアンバン、シェムリアップの3つの町を訪れたが、その様子は異なっていた。首都プノンペンには海外企業や新しい建物が建ち並び発展した一面があったが、その一方道路にはゴミが散乱していた。ホームステイ先のバットアンバンは地平線まで田園が広がり、高床式の家が多く見られた。私はホームステイ先で外での水浴びや、水がめから水をすくって流すトイレなど、初めての経験を数多くした。しかし家によっては風呂もトイレも無い家や、逆にシャワーがある家など同じ地域の中でも貧富の差が大きいことに驚いた。最後に訪れたシェムリアップは道路がきれいに整備され、たくさんのホテルがあったが、市場には物乞いのおばあさんがいたり、アンコールワットでは物売りの子どもたちがいたり、きれいな町の中にもカンボジアの暗い一面が見えた。日本のように町がきれいで、あらゆるものが揃っていることが当たり前という環境はとても恵まれていて、感謝しなければならないと実感した。

2つ目は、人々のつながりについてだ。ホームステイ先で過ごしていると、近所の方々や子どもたちが集まり、とてもにぎやかだった。子どもたちとは一緒に折り紙を折ったり、散歩に行ったりし、楽しい時間を過ごした。私が特に驚いたのは2日目の夕食の時だった。ホストファミリーと夕食を食べていると、近所の方々がご飯とおかずを持って集まり、一緒に夕食を食べ、とても楽しい時間だった。このようなことが日常的にあるのは私にとってとても新鮮で、人々のつながりの強さを実感した。

他にも青年海外協力隊の方々のお話を聞いたり、活動視察を行ったりした。協力隊の方々はカンボジアの発展のためにはどのような支援が必要なのかアイデアを出し活動をされており、また生き生きと活動されている姿は、とても印象的だった。また、中学校教員養成校では、学生の方々と話をし、私と同じ年くらいの学生が、国の発展のために貢献した

いなどの大きな目標をもっていることに驚いた。

今回この事業でカンボジアへ行き、青年海外協力隊の方々のお話を聞いたり、ホームステイ先で現地の生活をしたりするという体験は、観光旅行では経験することのできない貴重な体験ばかりだった。カンボジアへ行くまで、暗くて貧しい国のイメージが強かった私にとって、実際にカンボジアの様々な面を見て、そのイメージは大きく変わった。また、初めて日本を出て、日本がとても発展している国ということに改めて実感しただけでなく、その反面人々のつながりなど失っているものもあるのではないかと感じた。この事業で学んだたくさんのことと経験をこれから将来へ生かしていきたい。



ホストファミリーや近所の子供たちとの夕食



中学校教員養成校の学生さんと 本人：右

カンボジアに行って 思ったこと

加世田高等学校 2年 新原 瑠海

私がこの事業に応募したのは「海外に行ってみよう」というとても単純な理由でした。ましてやカンボジアのことなんてまったく知らず、首都の場所を覚えているかどうか怪しいものでした。

そんな私が鹿児島から韓国、乗り継いでカンボジアの首都プノンペンに降り立ちました。見えるもの、におい、温度、日本のそれとは何もかも異なり、五感全てで異国にふれていて「やっぱりここはカンボジアなのだな」と改めて思われました。



首都プノンペンにて 本人：左

カンボジアでの研修は日本での安全な暮らしが当たり前だと思っていた私にはなかなか大変な毎日でした。都市道路はバイクがひしめきあい横断することさえ勇気が必要で、街中を歩けばスリにあうからリュックサックは常に体の前にかけ、飲食店で出された生水や氷も信用できず…今まで私が感じていた「当たり前」や「普通」とはなんだったのだろうと思うほど180度違う世界に私はただ圧倒されるばかりでした。

そんな中、私が一番興味をもったのがカンボジアの歴史です。彼らの優しさや笑顔の過去に恐ろしい時代があるとは思わず、驚きを隠せませんでした。

ポル・ポト政権時代、それは1970年から1991年にかけてクメール・ルージュが支配した時代を指します。この時代に200万人以上もの人々が虐殺されました。彼らの多くは知識人である教師や医師であり、今のカンボジアの大きな問題となっています。



ホームステイ先の子供たちと

つまり、「人を育てる人」がいないのです。他のアジア諸国に比べて教育というものがなかなか重要性を帯びていません。地方では特にだと思います。働き手が少なくなるのに学校に行かせる理由が分からないと考えている人は少なくないと思います。まず考え方から変えていく必要があります。そのためにJICAの人たちの努力があります。JICAカンボジア事務所を訪れたとき感動しました。また、協力隊員の人達はみんな笑顔で楽しそうでした。私もあんな先生に教えてもらいたいと思うほど。簡単なことではないはずなのに、影の努力を少しも見せないことに本当に感激しました。

カンボジアに行って思ったのは「もっと知りたい」ということでした。多くのカルチャーショックはあったけれど、覚悟はできていたし、もっとひどい状態だと思っていたので研修は言葉の壁にぶつかりながらもおもしろいと感じていました。ただ今回事前にもっと調べておけばこんな悔しい思いはしなかったのだと感じます。ホームステイでは客人として扱われていましたが、次行ったときは地元の人と同じように接してもらいたいです。そのためには歴史や言語も勉強しなければなりません。大変なことです。研修に行って大きな収穫だと思います。この気持ちを忘れずカンボジアの土地をこの足で踏みしめたいです。

カンボジアでの「自感」

松陽高等学校 3年 今村 安里

カンボジアから帰ってきて二週間以上経った今、思い返してみるとあの一週間は夢だったんじゃないかと思ってしまいます。それぐらい、私にとってカンボジアで過ごした時間は、今までにない貴重な経験でした。

初日、勢いよく日本を出国し、これからが楽しみでしょうがなかった私に、じわじわと胸に不安が押し寄せてきたのを覚えています。でも、カンボジアに着いて飛行機から出たとき、その不安を忘れて、とてつもなく興奮しました。あの日、肌で感じたカンボジアの空気、湿気と夜の空港は今でも思い出します。覚悟していたカンボジアの暑さですが、私はとても好きだと感じました。日本との違いに感動していたからだと思います。

他にも感動したのは、バタンバンまでのバスの移動中の景色でした。カンボジアは平地ばかりで地平線の向こうまで緑色の草原です。こんな景色をあまり見たことがなかったので、世界の広さを実感したような気がしました。

ホームステイでは文化や生活様式の違いを目の当たりにして、さらに多くの事を感じました。お風呂（水浴び）やトイレ、炊事はもちろんですが、時間感覚が全然違うと思いました。時間にルーズであるということではなくて、自然のままに一日を過ごしているという感じです。朝の弱い私でも五時にはに

わとりの鳴き声で目を覚まし、昼は昼寝、夜は暗くなって九時頃には寝ます。日本では何かと時間に追われている気がするので、ゆったりとしたカンボジア時間は良いです。

その一方で言葉の壁は辛かったです。指さし会話帳を必死に使って話しました。うれしかったのは、おじいちゃんが本を使って、私に色々話をしてくれたことでした。毎日のご飯に出される庭でとれたフルーツを、本の中の絵（文字）を指して、「これはこれで、家のこの木からとれるんだ。」と一つ一つ教えてくれました。また、ママも料理中の台所を見せてくれました。後で通訳さんから聞いたおじいちゃんの「自分の子どものようにいんなことを経験させたいんだ。」という言葉は忘れられません。言葉が通じないからこそ身にしみてわかるみんなの優しさに、ただありがとうと言うことでしか感謝を伝えられなかったことが悔しいです。でも、言葉がなくてもきっと心で何か伝わったと思っています。他にもカンボジア独特の空気の匂いや食べ物の味、見える景色などどれも新しく、五感+心をフルに使って多くの事を感じました。

この体験ではここに書ききれない程たくさんを知り、視野が広がりました。今この高校生という時期に自分が感じたことは、これからの将来に大きく関わってくると思います。自分の中にしか残らないこの貴重な経験をこれからに活かし、将来の夢に向けて頑張ろうと決意しました。



ホームステイ先の家の庭



ホームステイ先の入口にあるヤシの木と家族 本人：左

カンボジアってどんな国？

志布志高等学校 3年 白鳥 康代

「カンボジア」とはどのような国ですか。カンボジアに行く前、私は多くの人にこの言葉をいわれた。正直、その時の私は答えることができなかった。行く前の研修でカンボジアの事を少し知った私であったが、具体的にどんな国なのかは、自分でインターネットを利用して調べてみたが全くといっていいほどわからなかった。このままで本当にカンボジアに行ったら何かを得ることができるのだろうか、出発前は期待より不安の方が大きかった。

日本から韓国。韓国からカンボジアへの長い空の旅を経て、いよいよカンボジアの街へという時、私はとても蒸し暑い熱気にやられた。空港を出てみると、見渡してみれば人、バイク。薄暗い街の中に並んでいる屋台にも人がいた。街の灯りはその屋台の灯りだけで私のカンボジアの第一印象は「怖い」というものだった。着いて数分でこんな気持ちになるなんて、この先大丈夫なのかと不安がさらに大きくなりつつ1日目を終えた。2日目から、気分も気持ちも上がりプノンペンのイオンや、JICA事務所訪問となった。JICA事務所では、カンボジアで活動しているたくさんの協力隊の方のされている仕事などを聞いて、新たな刺激を受けた。3日目は約6時間という長い長いバス移動でバタンバンに向かった。私は窓から見える景色が変わっていく様子に驚いた。さっきまで外を見れば、ビルなどが建ち並んでいたのに、10分も進めば、一面草原であった。



カンボジアの田舎道



ホストファミリーと 本人：右奥

そして、長いバスの旅を終え、ついに待ちわびたホームステイ。だが、私は驚愕した。日本はもちろん移動の途中で見た家ともかけはなれていたからである。壁という壁がなく、私が想像していたものをはるかに上回った。それに、わかってはいたが、お風呂とトイレも日本とは全く違い戸惑った。しかし、大変だったのは生活だけではない。最も大変だと感じたのは家族とのコミュニケーションであった。コミュニケーションをとることに自信があった私は、家族に自分の意思を伝えようと指さし会話帳で伝えた。しかし、私のお母さんはポル・ポト政権時代の方で幼い頃に教育を受けておらず、文字が読めなかったのだ。そこでどうしてよいかわからない私にお母さんはたくさん話しかけてくれた。それに答えることができず、悔しくて涙がでた。こうして私のホームステイ1日目は終わった。次の日、家族みんなで朝6時ごろ朝ご飯を食べた。その時、お母さんが市場で買ってきたスイーツを出してくれた。私が起きるずっと前に、そんなにお金に余裕がなかったはずなのに私のために買いに行ってくれたことを考えると涙が出た。その日から体調を崩してしまい、家族に心配をかけていたのに、私が戻ってくると嬉しそうに笑うお母さんの顔が忘れられません。その時、言葉は通じなくても心が通じるってこういうことか、と身をもって感じた。

まだまだ伝えたいことがたくさんあるが、書ききれない。その位、このカンボジアの旅は私にとって大きな刺激となった。この経験は必ず自分を成長させる大きなものとなったに違いない。そして、今なら「カンボジア」とはどのような国ですかと聞かれたら胸を張ってこう言えます。「人々の笑顔が溢れる私の第二のふるさとです」と。

カンボジアで学んだこと

大島高等学校 2年 川節 さやか

7月20日から7泊8日、国際協力体験事業の団員としてカンボジアを訪れました。訪問前、食生活が自分に合うか、言葉が通じない中でホストファミリーと仲良くやっていけるのかと、とても不安な気持ちでした。ですがそんなことを全く感じさせないぐらい、現地のスタッフの方々が温かく私たちを迎えてくれました。

私がカンボジアに行って一番心に残っていることは、JICA事務所で伺ったカンボジアの教育についてです。以前から発展途上国の教育制度について興味をもっていたこともあり、話をきくことをとても楽しみにしていました。

カンボジアでは、1970年から1991年にかけて内戦や圧戦などがありました。その為、当時の18歳以下の人たち（現40～50歳）は、十分な教育を受けることができなかったのです。その名残があり、現在の中学校に通う学生は60%となっています。日本で当たり前のように学校へ行き、勉強している私にとって、とても衝撃的なことでした。

外から日本を見つめ直したことで、日本は本当に恵まれている国なんだと再確認することができたと思います。

また、約四日間のホームステイでもたくさんの思い出ができました。ホストファミリーは私にとっても優しくしてくれ、カンボジアでしかできないような生活をさせてもらえたと思います。私のホームステイ先のお家には水道がなく、雨水を溜めて、料理をする時やお風呂の水などに使っていました。

ホストマザーはおいしいカンボジア料理や、スカートを用意してくれました。私がスカートをもらって喜んでいると、市場へ布を買いに行き、もう一着作ってくれました。本当に優しいお母さんです。ホストファーザーは、私が作った日本料理を「チュガニユ（おいしい）」と言ってたくさん食べてくれました。ホストシスターやブラザーは、どこへ行くにも私の手を握って歩いてくれました。時間を重ねるにつれて、本当の家族のようになった気がします。

四日間という短い期間でのホームステイでしたが、

人と人との繋がりは本当にいいものだなと思いました。今回の研修を通してできたカンボジアと日本の関係を、これからも絶やすことなくお互いの国を理解して交流を続けていきたいです。

最後に、この体験事業に参加するにあたり、たくさんの方々にお世話になりました。また、離島奄美からの参加ということで大変な面もありましたが、無事終わることができ、私を応援してくださったみなさんに感謝したいです。カンボジアで経験したことをこれからの進路に生かしていきたいと思います。

オークン（ありがとう）



お土産のビーチボールで遊ぶホストブラザー



ホストファミリーと 本人：中央

将来を見据えて

龍桜高等学校 3年 内村 朱里

カンボジアは明るかった。青年海外協力隊が活動していると知ったときから、私のカンボジアに対するイメージは、電気や水道の設備が整わない所。夜は町の明りは消え静寂に包まれるのだろうと勝手に考えていた。しかし、現実とは違った。私たちの降り立ったプノンベンとは、急速な開発の進む都市であった。イメージと現実の差にひどく驚いた。だが一方で、都市部から少し外れるだけでビルは無くなり高床式の家屋が並ぶ風景へと一変する。またそれは、医療や生活環境についても同じことがいえる。まず、生活環境についてだが、環境といえばゴミである。プノンベンの道路脇に積み上げられた大量のごみの山には唖然としたが、まだゴミの収集を請負う業者がいる。けれど、郊外は違う。処分しきれないゴミが沢山散らばったままの様子が見えた。「まだ、カンボジアは綺麗な方だ。」と言っていたが、日本しか見ていなかった私には十分衝撃的であった。

次は医療だ。2日目に、カンボジアで医療関係の仕事に長年かかわってきた島田さんから話を聞いた。この国には、医師や看護師の資格というものがない。また、ポル・ポト政権時代の影響があるのか医療への意識・関心が低い状況にあったのではないかと考えた。医療の質の方もそうであるが、設備の方も十分とはいきれない。地方では、薬が十分にないため民間療法で治すと通訳のシネットさんは言っていた。医療費も高いらしく、普段から体調が悪いとすぐに病院に行けるというのは、深く考えたことはな



食事で島田さんと 本人：右



バットマンの市場

かったが、とても恵まれているのだと感じた。

明るくといえば、カンボジア人の人柄である。暗い歴史をもつカンボジアは寡黙な人たちが多いのではと思っていた。だが、話をしてみると言葉は上手く通じなくても積極的に笑顔で話しかけてくれる人が多かった。一番の不安であった言葉の壁も、言い回しの違いに戸惑いもあったが、楽しい時間を過ごすことができた。

初めての海外、不安と期待と自分を変えてみたいという希望をもって臨んだ。そして、日本基準で考えることを止めた。この機会のおかげで広い視野で世界を見ることができるようになった。心が広がった。私は今度、海外に行くときは自分のできる最大限の人のためになる事をしたい。そのために、私は今からできることを探す。当面の目標は看護師国家資格を取る事だ。日本にいて、海外のためにできること、人のためにできることを今はしていく。そして、海外のことを知り日本のことを海外に伝えていけるような人間になりたい。精神的にも肉体的にも成長し続けていく。

国際協力体験事業を通して

薩摩中央高等学校 3年 佐々木 拓真

私がこの体験事業に参加しようと思った理由は2つあります。

1つ目は、小さいころから海外に対して興味があり、特に発展途上国に関しては、メディアを通じて知るのではなく、自分の肌で直に感じたかったからです。

2つ目は、私の夢はスポーツトレーナーのプロフェッショナルになることであり、将来技術を磨き、日本が狭いと感じた時に発展途上国に行き、子どもたちにスポーツのすばらしさを教えたいという夢があるので、この体験事業の中で発展途上国のスポーツ事情に触れて、将来の夢に役立てようと思ったからです。

そして、実際カンボジアに行ってみると都市のプノンペン思った以上に発展していて、ここは発展途上国なのかと疑うほどでした。町中を歩くと、周りには豪邸が建ち並び、日本の大企業イオンも進出し、日本以上に発展をしているのではと思うほどでしたが、発展していたのは都市だけで、ホームステイ先のバタンバンに行くと、交通整備は全く整っておらず、至る所にゴミが散乱し、都市と地方の差に驚きました。

4日目ホストファミリーと一日ずっと一緒に過ごす時間があったのですが、なかなか打ち解けられず、一人で昼寝をしていたところ、外から子どもたちの

笑い声とボールをける音が聞こえ、起き上がって子どもたちの輪の中に入り一緒にサッカーをして遊ぶと、思った以上に喜んでくれ、自分とホストファミリーとの間にあった厚く大きな壁が一気に崩れ、やっと通じ合えたのだと感じ、改めてスポーツの偉大さに気づかされました。

そして驚いたことに、この村の人の大半は携帯電話を持っていてゲームや動画を見ている人もたくさんいました。ここは発展途上国なのだと忘れそうになっていた時、最終日アンコールワットを訪れ、道路の片隅に座り込み物乞いをする老婆や、物売りをしてお金を稼ぐ子どもたちを見た瞬間、これが現実なのだと思います。その時私は、見て見ぬふりをするしかない自分がとても情けなく憤りさえ感じましたが、今思えばそういう風に思えること自体が日本では味わうことのできないとても貴重な体験だったのではないかと思います。

この体験事業を終え、慣れないことの連続で体調を崩したこともありましたが、同行者のみなさんや団員のみなさんのサポートのおかげでカンボジアでの生活を有意義に楽しく過ごすことができました。

そして、発展途上国のスポーツ事情に触れたことで私の夢は大きく変わりました。スポーツトレーナーというプロの選手のケアをするだけではなく、様々な国、色々な年代の方にスポーツをする楽しさを教えることのできる、そんな仕事に就きたいと私は思っています。



ホームステイ先の家族と 本人：中央



アンコールワット

輝く未来へ

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長

団長 弓場 秋信

鹿児島空港国際線ターミナル結団式の会場に入ると、時間前にも拘らず団員全員が席についている。一人一人に「チュムリアップソウ ソックサバイ（こんにちは、元気？）」と、声をかけると、緊張と笑顔が交差した表情で「サバイディー（元気です）」と返ってくる。結団式で団員が述べる抱負を胸に留め、カンボジアへと向った。

団員が想像していた首都プノンペンの町は、明かりも乏しく、高層ビルも無い田舎町。しかし目の前に現れた街並みは見事にそれを裏切り、開発途上国とは言え一国の首都の顔を見せた。国際協力機構（JICA）カンボジア事務所で、カンボジア事情の説明を受けた。その中で団員が、年齢別人口構成（人口ピラミッド）に不自然な時期を発見した。学んでいたポル・ポト政権時代の大虐殺に相当する時期である。その不幸な時期が、教育制度の未整備・社会資本の遅れをもたらしている。平均年齢23歳の若い国カンボジアに、今最も必要なことは、人を育てる事である、と学んだ。

ホームステイ先バットバン州ソムロン村への6時間のバス移動に、ベトナムの南部商都ホーチミンとタイの首都バンコックを結ぶ南部経済回廊を利用した。南インドシナ半島の経済発展を担う大道脈は、一部未整備ではあるが平地が続き将来のカンボジアの発展を予感させるに十分であった。

少しの不安と大きな期待を胸に、ホームステイ先22家族を探して頂いた岩田さんのHOC（孤児院）に到着した。笑顔がはち切れんばかりの岩田さんや院生に迎えられ、団員一人一人をホームステイ先に案内する。囲いも無い庭先で、雨水を貯めた水瓶から手酌で布をまとっての水浴、高床式の家。団員の想像を遥かに超える生活環境の落差。「4日間生活出来るかな」と心配しつつも、狙い通りの環境・家族に団員の変化・成長が楽しみである。

ホームステイ期間中に訪問したチアシム小学校で協力隊員として活動していた森本隊員。児童と一体となり輝きを放つ授業風景は、団員を圧倒し憧れの的となった。またバットバン州中学校教員養成校での学生との交流では、学生の意識の高さ、家族や国を思う心に感激していた。同世代との語らいはより深く団員の胸に届いたようだ。

4泊5日のホームステイは、団員にとって異なる環境への適応、言葉が通じない中で、如何に相手の言わんとすることを理解するか、また自分の思いをどう伝えるか。全ての細胞を動員しての真剣勝負の日々であった。ある団員が呟いた、「これからは、どんな環境でも乗り越えられそうだ」。新たな自分の発見と環境変化への適応力が備わり逞しく成長した団員が眩しく見えた。16名の団員がそれぞれの夢に向かって歩み、輝く姿に会えますように。

最後に、ホストファミリーの皆様の心温まるもてなしに深謝いたしますと共に、それぞれの役割を十二分に発揮した同行者の谷口さん、坂元さん、福永さん、吉崎さんに心より感謝いたします。そして同行取材の森山さん、柳沼さん有難うございました。



団員との一コマ 本人：右



ホストファミリーと 本人：左奥

体験事業に同行して

青年海外協力隊カンボジアOG 福永 未帆

2012年9月まで、カンボジアで青年海外協力隊として活動していた私にとっては約二年ぶりの訪問でした。

カンボジアに着いた時に「懐かしい」と感じるのかなと思いましたが、特にそのようなこともなく、昨日もカンボジアにいたような、数日だけ日本に遊びに行って戻ってきたようなそんな感覚でした。

子供たちはというと、日本とは違う空気に少し不安がっているようにも見え、また新しい世界に期待しているようにも見えました。

この一週間でどのようなことを子供たちは感じるのかが、私は知りたいと考えていました。

首都プノンペン急速に発展し、イオンが出来ておりました。観光省で活動しているボランティアの方からカンボジアのこれからの観光などについて話を聞くことが出来、私も勉強になりました。

ホームスティ先はカンボジア第二の都市バットアンのある村でした。バットアンは街は大きかったですが、そこから少し離れた村はカンボジアの一般的な田舎でした。

子供たちはプノンペンと村の違いをどのように思っているのかなと考えながら、子供たちのホームスティ先を訪問しました。ホームスティ先の家族とコミュニケーションをとれずに不安がっている子、野外で布を巻いて水シャワーをおこなう環境の子、石造りの大きい家の環境の子などみんなが同じ環境ではありませんでした。子供たちそれぞれ思うことはあったみたいですが、子供たちは子供たちなりに家族とコミュニケーションをとり、カンボジアの村の環境を楽しんでいました。

ホームスティ先と仲良くなり、慣れてきたころ、私に会った時に「クメール語でこれはなんといいますか」「これってどういう食べ物ですか」といろいろ聞いてもらえるのはとても嬉しかったです。

また、家族にクメール語で伝えたいことがあるというので、私が通訳しようすると、「自分で伝えます」という様子や、プノンペンではあまりご飯が食べられなかった子もホームスティ先ではしっかりと食べることを知り、カンボジアの村の環境に馴染

んでいると安心しました。子供たちの適応能力の高さに驚かされました。

ホームスティも終わり感想を聞くと、一言では伝えられない、文化の違いを感じたなどの意見があり、短い間でしたがたくさんのことを学び、吸収したことが分かりました。

日本に戻ってきたとき「カンボジアに戻りたい」という話を聞いて、いつか戻ってもらいたいと思いました。

ぜひ、子供たちはカンボジアで感じたことを友達、学校の先生、そして家族の方に伝えてください。また生活しているときに時々カンボジアの家族や生活を思いだしてみてください。

多感な時期の中高生と海外に、しかも、私が住んでいた国に同行させてもらえるという貴重な体験をさせていただきました。この体験を通して、私自身も改めてカンボジアの様子を知り、また子供たちや同行者の意見で新しく気づかされることもありました。今後、この経験を生かしたいと思います。

本当にありがとうございました。



お世話になったトゥクトゥクのお兄さんと 本人：左



お別れのシーン

国際協力体験事業に同行して

青年海外協力隊モロッコOG 谷口 光代

今回の体験事業の同行は、去年に続いて2回目となりました。毎年健康管理として同行する協力隊OGは1名ですが、今年の訪問国であったカンボジアは、この体験事業では初めてであり、環境が日本と大きく異なる状況など様々な理由で2名同行することが決まりました。そのことを知った私は、安心できる反面、2名同行が決まった意味を考えると気が引き締まり、緊張がある中での出発となりました。

カンボジアに到着し、プノンペンのホテルで2泊の宿泊でしたが、日本のホテルと比べると不便に感じるところもあったり、食事もちろん違うために食がすすまない団員。これからホテルとは違った住環境や言葉も通じないところに1人ずつの4日間のホームステイを考えると、健康管理としては不安が募りました。しかし、日に日にそんな不安を団員は払拭してくれました。

ホームステイ先では、お風呂は外での水浴び、食事はカンボジアの家庭料理、早朝からにわたりの元気な「コケッココー」で自然な目覚まし時計代わりになっていました。そんな状況の中で、会話も思ったように通じない中で最初はとまどいや不安を抱いていた団員でしたが、環境に慣れ、様々なことを受け入れ、目が輝いていく姿がそこにはありました。体調を崩してしまった団員もいましたが、ホームステイ先の家族は心配し、私がお願いしたわけでもなく水浴びの水をお湯を混ぜて温かいものを準備して



団員の健康チェック 本人：左

くれました。はじめは食がすすまなかった団員も、カンボジア料理がとても美味しいと、帰国後の体重を気にしていたり、躊躇することなくいろんな料理にチャレンジしている団員の話聞いて、本当に嬉しく、たのしく思いました。団員とホームステイ先の家族が日に日に打ち解けてわが家族のように接してくれる姿を垣間見ることができましたし、言葉が通じなくても十分に伝わることをあらためて感じることができました。

青年海外協力隊の視察で実際活動している隊員の姿を見たり、JICAの専門家として活躍されている方の貴重なお話を聞く機会もあり、団員が真剣に話を聞いているまなざしが印象的でした。出発前に国際関係の仕事に就きたいと語る団員もいましたが、この体験事業での経験を活かして、ぜひ新たな1歩を踏み出して欲しいと思います。

この体験事業のプログラムは本当に素晴らしく、私自身、去年とまた違った気づきや学びがたくさんありました。昨年帰国後に参加できなかった表敬訪問でしたが、今年は一緒に同行させていただきました。団員が話す体験事業での学びや感じたことを聞いて、それぞれが本当に素敵な体験をし、しっかりと自分のものにしていました。この体験事業は事前研修から始まりますが、体験事業のスケジュールも本当によく考えられており、これからもずっと続いて欲しい素晴らしい体験事業だと思います。

弓場会長をはじめ、関係者の皆様、団員、同行者の皆様に貴重な体験をさせていただいたことを心から感謝申し上げます。オークン・チュラン！（ありがとうございました）



ホームステイ先の家族と 本人：中央手前

国際協力体験事業に同行して

青年海外協力隊ボリビアOG 坂元 絵理

初めに、カンボジアへの国際協力体験事業にて皆様の健康管理員として同行させて頂いた事に深く感謝したいと思います。カンボジアでの一週間を皆さんと共に過ごし、皆そろって鹿児島へ無事に帰ってこれた事に安堵しております。

異文化がもたらす身体・精神面への影響は大きいながらも、子ども達へ毎日声かけを行って行く中で、日を増すごとに子ども達のたくましさ、目の輝き、子ども達の団結力を間近で感じる事ができました。蚊帳の中で寝ることや、トイレでは桶を使って水を流すこと、外で水浴びをすることも日本で体験できないことであり、それに対し異文化を共有しようという子ども達の積極的な姿勢が見られ嬉しく思いました。

健康管理スタッフとして、カンボジアの病院やホームステイ先などでお世話になることもありましたが、関わった方の丁寧で心温まる優しい対応に嬉しく思うと共に、感謝の気持ちでいっぱいです。カンボジアの方々の優しさを改めて実感いたしました。言葉が通じないことも多くありましたが、通訳の方やまた英語やジェスチャーなどを使って物事をなんとか伝えることもできました。言葉が十分でなくても、人への思いやりや優しさが世界共通であることを痛感するとともに、私自身のよい体験にもなりました。

印象に残っていることは、ホームステイ先とのお別れ会や、カンボジアで活躍する専門家の方との交流です。お別れ会では、子ども達のパフォーマンスがあり、感謝の気持ちが伝わり、子ども達がカンボジアを大いに体験できたことを実感しました。また専門家の方の話では、国際協力とは「魚釣り」に例えられることも話され、良い勉強をさせていただくとともに、私自身も今後精一杯頑張っていきたいと思うことができました。

この国際協力体験事業は今回で23回目を迎える素晴らしい事業であり、子ども達が国際協力を身近に感じ、体験できる素晴らしいものであることも実感しました。

是非、感じ体験したものを周りの人に伝えることをしてもらおうと共に、これからもこの事業が継続さ

れ、いろいろな方々に国際協力を体験して頂きたいと強く願っています。

皆さんと一緒にカンボジアを体験し、カンボジアの方の優しさや笑顔に触れあうことができた充実した一週間でした。また、カンボジアへ一緒に行くことができた同行者の皆さん、団員との出会いにも感謝したいと思います。

最後になりましたが、弓場会長を始め、本事業の諸関係者の皆様へ深く心からお礼申し上げます。私自身も、子ども達が夢に向かって進む姿にパワーをもらい、この体験を今後に生かしていきたいと思っています。本当に皆さんありがとうございました。またお会いしましょうね。



ホームステイ先にて 本人：中央



団員と 本人：左

カンボジアに同行して

(公財)鹿児島県国際交流協会

交流推進員 吉崎 美幸

事務局としてこの事業に携わって2年目の今年、同行者としてカンボジアへ同行する機会をいただきました。

同行が決まってから出発までは、カンボジア渡航経験もなく、東南アジアへも1度しか行ったことのない私なんかが同行して大丈夫なのだろうか、16名の団員とは仲良くやっていけるのだろうか、彼らの貴重な1週間の体験を実りあるものにすることが出来るだろうか、体調を崩したりして他の同行者の方に迷惑をかけてしまわないだろうか、と不安ばかりが先行していました。

首都プノンペンでは、発展が進んでおり、2日目の昼食を食べたイオンモールは日本のそれと全く同じように感じました。日本と違うのは、バイクの多さ、イオンの駐車場も広いバイク置き場があったことが印象的でした。

最初はどこか不安そうな顔をしていた団員達でしたが、プノンペンからバスで約6時間のバタンバン州での1人1家庭のホームステイが始まると、日に日にたくましくなっていくようでした。プノンペンではご飯が口に合わないと言っていた子がおいしいとご飯を食べていたり、ステイ先や近所の子供たちと楽しそうに遊んでいたりと、日本と違う環境の中での生活を楽しんでいる姿に安心しました。また、団員のことを本当の子供のように大事にしてくださっ

ているホストファミリーの姿を見るたびに、人々の優しさや温かさを感じ、うれしかったです。

滞在中、JICAカンボジア事務所やJICAボランティアの方々を訪問し、現地での活動の様子などのお話を伺うことも出来ました。そこで、ポル・ポト政権時代に行われた知識人の虐殺の影響で教育が行き届いていないと聞いてはいましたが、実際ホストファミリーの中には、文字の読み書きが出来ないお母さんも多く、団員もコミュニケーションをとるのに苦労することがあったようでした。

現地で生き生きと活動されている方々の姿に、感銘を受けた団員も多かったようです。また、彼女たちの「ものを与えるだけでなく人を育てることが大切だ」という言葉は私の心にも強く印象に残っています。

家族と離れ、異国の地で過ごす1週間で子供たちが色々なことを吸収し、頼もしくなっていくのをそばで見ていると強く感じました。

今回、このような貴重な体験をすることが出来たのも、弓場会長はじめ、同行者の皆様、現地に対応して下さった関係者の方々、鹿児島でサポートして下さった方々など沢山の方の支えがあったからです。本当にありがとうございました。同行させていただき、この事業の素晴らしさを改めて感じる事が出来ました。

また、頼りない私の指示を聞き、訪問先で私の想像以上に沢山のことを吸収してくれた16名の団員たち、一緒にカンボジアに行くことが出来て良かったです。ありがとうございます。カンボジアで感じたことを忘れず、今後の生活に活かしてってください。皆さんの今後の活躍を楽しみにしています。



同行者と 本人：左



団員と 本人：左

衝撃と感動の日々

南日本新聞社報道部

記者 森山 莉華子

カンボジアを訪れるまで、知っているものといえば「アンコールワット」「ポル・ポト政権」…マラソンでオリンピック出場を目指す猫ひろしー。知っていたのは“何となく”調べた情報だけだった。初めて日本を出て、いかに井の中の蛙であったかを実感した。

真っ先に驚いたのは急速な経済発展だ。飛行機から見下ろすプノンペンの街。街路を照らす、オレンジ色の光が煌々とした様子が印象的だった。時計に目をやると午後10時。街には車が行き交い、空港前に人があふれていた。ビルには日本企業の看板も見受けられた。

JICAカンボジア事務所では「ここ2年でも急激に成長した。イオンモールができ、ますます姿は変わっていくのでは」と街の様子を見つめていた。確かにイメージしていたカンボジアの街は、屋台が並んでいて、原付で人々が行き交う様子だった。「発展途上国」という言葉に気を取られていたのかも知れない。

一方、支援慣れが深刻な問題となっていた。日本をはじめ、中国、韓国などの文化が流入し、経済面でもどこか他国頼りの雰囲気漂うカンボジア国内。人材育成なくして、国の成長は頭打ちになってしまう。

人材を育てるのに欠かせないのは学校教育だろう。ただ、ポル・ポト政権下の傷は深いと、学校の教育現場やホームステイ先で実感した。

小中学校は義務教育といえども、サボる子どもが多くいる。先生の月収も100ドル程度と副職をしながらで、訪問した小学校では「3日前から先生が来なくて、授業がない」と不安そうな顔で、校内に座り込む児童の姿もあった。

現地で音楽と体育の教員を務める、青年海外協力隊・森本早紀さん＝鹿児島大学出身＝は「国語と算数は一生懸命学ぶが、それ以外のことをサポートしたい」と奮闘していた。子どもたちは森本さんの授業に目を輝かせ、楽しげな様子だった。学ぶことへの興味を引き出せるかが、教育では大きなカギを握ることを実感した。森本さんをはじめ、多くの青年



ホストファミリーと 本人：左



団員と 本人：中央

海外協力隊がカンボジアなど多くの発展途上国で教員として派遣されている。子どもたちが教育を受けることでどんな成長を遂げるかに期待したい。

経済や教育であらゆる格差を感じたが、ホームステイ先での生活が印象深い。水浴びに、水を汲んで流すトイレ…予想はしていたものの驚いた。指さし会話帳を必死にめくりながらの会話、日々の食事、朝6時からの掃除と新たな挑戦の連続だった。言葉が分かり合えなくても、ホストファミリーと通じ合うものを感じた。

出会いは帰国後にも変化をもたらした。身の回りの整理整頓や、家族への気配りにもつながった。この感動を多くの人に伝えていきたい（同行させていただき、ありがとうございました）。

カンボジア体験記

株式会社南日本放送

報道局テレビ制作部 柳沼 雅貴

私は、4月に北海道から鹿児島に来たばかりで、県内のことをほとんど知らない。離島に行ったこともない。海外に行ったことすらない。そんな“ないない”人間が、鹿児島の中高生と一緒にカンボジアに行って同行取材？最初に聞かされたときは、悪いジョークと思いました。一番不安だったのは、16人の中高生との交流です。思春期真っ只中の彼女らがカメラの前で素直にインタビューしてくれるのか不安でした。私は、ただ1つカンボジアに行く前に決めていたことがあります。それは、16人全員の声を放送に出すこと。きっと彼らは、カンボジアでの生活、ホームステイに新鮮な感想を抱かず！どう感じたのか取材しようと心に決めました。

いざカンボジアに着いて、私が最初に感じたのは都会だということ。首都プノンペン、車、バイク、お店も多く、活気ある都市でした。しかしその一方、日本では考えられないようなひどい運転の数々。信号機はほとんどなく、もうやりたい放題！前から後ろから横からクラクションの嵐。そんなカンボジアの交通事情がとても印象的でした。

そして不安いっぱいのホームステイ。首都プノンペンから280km離れたバタンバン郊外のホームステイ先です。私がホームステイした家族は、近所の子どもがたくさん集まってくる大きな家でした。一緒に遊べ！と何度も言われ、毎日ヘトヘト。その

中で、とくに懐いてくれた女の子が、一緒に指差し会話帳を見ながら発音練習に付き合ってくれました。私自身、発音はうまくなるが、その言葉の意味が覚えられない。もっと言葉が分かって意思疎通できたら、きっと楽しいのにな～と事前勉強の甘さが悔やまれます。

私が一番うれしかったのが、食事！何もかもがおいしくて、毎食ごはんをおかわり！ホームステイ先にも笑われるほど食べました。痩せて帰る予定が、なんと2kg増量！特に好きだったのは鳥肉を甘辛く焼いた鳥ごはん、冬瓜のスープ。毎食どんな料理が出てくるのかとても楽しみでした。

大事な撮影についてですが、予想に反してみんな素直にインタビューに答えてくれました。ただ何故か途中から私への対応がおかしいことに！「やぎちゃんさ～」、「え～やだ」などなど。あれ？あれ？俺一回り上だよ！と不思議に思いつつ楽しく撮影することができました。心残りなのは、ホームステイ先での生活の様子をじっくり撮影できなかったことです。どんなものを食べて、どんなところで寝ているのか。カンボジアの農村地帯らしい生活を紹介できなかったのが私の力量不足でした。

反省点もありますが、今回カンボジアという国の活気を肌で感じ、もっと色々な国に行ってみたい。もっと色々な人に会ってみたいという思いが強くなりました。こんな貴重な体験をさせていただいた関係者のみなさまに、心から感謝申し上げます。



ホストファミリーと 本人：前列中央



取材中の一コマ 本人：右

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：鹿児島県、鹿児島県教育委員会、独立行政法人国際協力機構

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数(生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)~4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祁答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スプランベラ)	平成4年 3/27(金)~4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)~7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)~8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)~8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 頤娃町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン, パリットムントリー)	平成9年 7/27(日)~8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)~8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 始良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)~8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンボン)	平成12年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 末吉町, 串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)~7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)~8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県 を予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフル エンザの影響により中止			市町村推薦 予定
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレンガヌ州)	平成16年 7/19(月)~7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村)	平成17年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市, 国分市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州)	平成18年 7/22(土)~7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第16回	ベトナム (ハノイ, バクザン省, バクニン省)	平成19年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 枕崎市, いちき串木野市, 霧島市, 南さつま市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県ポンミー村)	平成20年 7/20(日)~7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県ナーソン村)	平成21年 7/19(日)~7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシ州, ビナバサ村)	平成22年 8/1(日)~8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第20回	マレーシア (クランタン州, クバンテラガ村)	平成23年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第21回	ベトナム (ホーチミン市, ティエンザン省 ヴイントイ村)	平成24年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第22回	ベトナム (ダナン市, ホイアン市)	平成25年 7/21(日)~7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, いちき串木野市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第23回	カンボジア (プノンペン, バッタンバン)	平成26年 7/20(日)~7/27(日) (7泊8日)	23名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
	計6カ国	計(285) 平均13人			



＝ 編集・発行 ＝

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町14-50 かがしま県民交流センター1階
公益財団法人鹿児島県国際交流協会内

TEL: 099-221-6620 FAX: 099-221-6643

担当: 吉崎 美幸、大内田 祥子

裏表紙デザイン: 今村 安里(鹿児島県立松陽高等学校3年)